
幼馴染 恋人になる条件

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染 恋人になる条件

【Nコード】

N0097Z

【作者名】

りんか

【あらすじ】

「結婚してください!!」 そうプロポーズしてきたのは、小学三年生の幼馴染の男の子。「あと15年経ってカッコイイ男の人になってたら、考えてもいいかも」と答えた次の日。高校生である相原美結の前にあらわれたのは、20歳くらいの超絶イケメン。その彼が面と向かっていきなり告げてきたのは、「結婚してください」という突拍子もない言葉だった。いろいろな条件をつきつけて彼からの求婚を逃げ続けるものの、なんだかなし崩し的に話が進んでしまっているような気がしてならない彼女と、そんな彼女にふりまわ

されているはずなのに、異世界で最強の力を手に入れたおかげで、
なんなく条件をこなしていつてしまう彼とのラブコメディ話（の予定）。

(1) (前書き)

ちよっと思うところがあり、衝動的に書いてみました。不定期更新になります。よろしくお願いします。

(1)

「結婚してください!!」

家を出て、高校へ向かう途中の通学路。突然響いたその言葉に、私は目を何度も瞬かせながら振り向いた。

そこには、ランドセルを背負った小学三年生になったばかりの男の子。その子が、すぐ真剣な顔でこちらを見上げている姿があった。見慣れたその子に、私はふう、と息を吐く。

「おはよう、あつくん」

軽くあいさつをすれば、黄色い帽子に包まれた頭をずいっと私の方に押しやりながら、その子　あつくんはあいさつの返答もそこそこに、私へつめ寄ってくる。

「ねえねえ、いつ結婚してくれる？」

「いつって、それ昨日も一昨日もその前もきいてきたじゃないの」「だって、ちゃんと答えてくれないんだもん」

ぶつと頬をふくらませるあつくんに、私は苦笑いを浮かべた。そういう話題はあまり興味がない、て言ったらもつと怒るんだろうな、この子は。

私は「うーん」と首をひねりながら、まっすぐ立てた人差し指を唇に当てた。

「そうだなあ……、あと15年経って、あつくんがめちゃくちや力ツコイイ男の人になってたら、考えてもいいかも」

私の答えに、あつくんの顔がぱあつと輝いた。

「15年だね？ わかった。絶対だよ？ 約束だからね、美結^{みゆ}おねえちゃん！」

駆けていく背中を見送りながら、私は手を左右に振った。

可愛いなあ、と朝からほのぼののしてしまう。今日で何回目だろう、あつくんからのプロポーズ。今までは「急いでいるから、また今度ね」と適当にあしらってきたけど、今日は何となく条件を出してしまった。

彼は、将来イケメンになるんだろうな。幼いけれど、すごく整った顔立ちをしているもの。

15年……、かあ。思いついたまま口にしてしまったけれど、15年も経ったら、私は三十路超えのおばさんだ。どう考えても、眼中にはないだろうな。

「ま。もともと私、年下には興味ないしね」

そうしめくくって、私はいつものコースで高校へと向かった。

「結婚してください」

「……は？」

私の前には、ちょっと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

その彼に、私は通学途中の道ばたで、いきなり面と向かってそう告げられたのだ。

なんで？ どうして？

私の頭を、？マークが大量によぎっていく。

「あの、誰かと間違っていますか？」

「いや。きみは、相原美結さんでしょ？」

「そうですけど……、どうして私の名前を知っているんですか？」

「幼馴染だからね、きみとおれは」

「はい？」

いやいやいや。

私の幼馴染に、あなたのような超絶イケメンさんは、どこをひっくり返しても出てきませんから。

「やっぱり人違いですよ。他の“相原美結”さんを当たってください
い」

そう言っつて、私は彼の横を通り過ぎようとする。

と。私の手首がガツとつかまれ、振り向いた私に彼がつめ寄ってきた。その真剣な顔立ちに、私はデジャブを感じ思わず息をのむ。

「あの言葉は、嘘だったんだ？」

「あの言葉……っつて」

たずねられても、私には心当たりが全くない。

そんな私に、彼は少しだけさびしそうな表情を浮かべた。

「15年経ったら結婚してくれるって言ったじゃないか。美結、お

ねえちゃん」

「……！」

その言葉に、私は絶句してしまった。

確かに言った。確かに昨日、この場所でそう言った。

でも、ちよつと待って。それを言った相手は、昔から知っている幼馴染の小学三年生の男の子で。どう考えても、目の前の超絶イケメンと結びつかない。だけど、そう言ったのはあの子にだけ、しかも他に兄弟のいない私を“おねえちゃん”呼ばわりするのは、あの子だけしかいないと思う。

いやそんな。まさか、もしかしてもしかする、わけ？

「……あつくん、なの？」

「そうだよ」

そのあっさりとした返事に、私はただただポカーンとなりながら、目を見開くだけだった。

(2)

……ハッ。

秒針がきつちり一回転したんじゃなかるつか、それくらいきつちり間を置いて、私は我に返った。

ありえない。落ちついて普通に考えてみたら、ありえない。そう、ありえないでしょうが。

この超絶イケメンが、幼馴染で小学三年生のあつくん？ そんな簡単にイコールで結びつくわけがないってば。

なにこれ、新手のあつくんですよ詐欺？ ああもう、よくわからなくなってきた。こういうときは。

「じゃあ、そういうことで」

なかったことにするのが一番だよな。学校に遅刻するとマズイし、うん。

通り過ぎようとした私の手が、再び引かれる。しまった、手首つかまれたままだった。

「ちょっと待ってよ！ まだ、何か足りないものでもあるの？ 約束どおり、15年経ったからきみを迎えにきたのに」

いやあの、意味がわかりません。

15年経った？ 昨日の今日で、まだ一日しか経っていないはずなんですけれど。

それより何より。

「本当にあつくん、なの？」

「そつだよ。きみの家の二軒隣に住んでいた、瀬田秋斗^{あきと}」

超絶イケメンが名乗った名前は、確かにあつくんの本名だった。

「なら、証拠はある？」

「証拠？ …… 困ったな。こつちの世界のものは、全部彼に処分されてしまったんだ」

ん。こつちの世界？ 処分？ なんのこと？

なんとなく気になるワードが並んだけれど、超絶イケメン い加減この呼び名も疲れたし、超イケに略しちゃおう。

考える仕草を見せていた超イケは、ふいに「ああ、そつだ」と手をたたいた。

「証拠になるかわからないけど、おれが覚えているきみの情報を話してみるよ。相原美結、17歳。ちよつとくせつけの黒髪黒目の純和風人。×高校三年生。両親が海外赴任のため、今は一人暮らし。兄弟姉妹はいない。掃除は得意なのに、料理は壊滅的。自分では美味しいと思っているものだから、たちが悪い。この前……、でいいのかな？ 砂糖と重曹を入れ間違えて斬新すぎるクッキー？ みたいなを作ったこと、あったよね？」

ちよつとそこ。クッキー？ とか疑問系にしないで。

あれはクッキーだったの。誰が何と言おうとも、ひよこ型のクッキー。

まあ少しいびつになっちゃって、うねうねとした怪しい生物になっってしまったけれど。

「砂糖と塩を間違えるのは聴いたことあるけど、重曹って。…… ああ！ もしかして、砂糖じゃなくてベーキングパウダーの代わりに

入れたの？ それなら、納得かな」

「え、と別にそういうわけじゃ……」

「重曹を使おうなんて、普通思わないのにね。でも、一人暮らしの女の子の家に食用の重曹がある時点で、めずらしくてすごいことか」

腕組みして感心したようにうなずく超イケに、私は苦笑いを浮かべた。

全然きいてないし。なんなの、この自然にプラス思考というか、天然っぽいマイペースっぷりというか。

けど、このことを愚痴 もとい、話した異性はあつくんだだけだ。まさか本当の本当に、この超イケは……。

「ね？ こんなこと知っているのは、おれが正真正銘の秋斗だからでしょ？」

嬉しそうに告げてくる超イケに、私は口ごもる。

もし仮にこの超イケがあつくんだとして、どうして急にこんな姿になったわけ？ 現実では、絶対にありえない。まさか青いロボットの力を借りて、未来からタイムスリップしてきたとか？

そういえばさっき、なんかちょっと引っかかりのある言葉が。

一人無言で考えていた私を、どうやらまだ疑っていると思ったら、しい超イケは、「まだ信じられないの？」と嘆息した。

「なら、とっておきの情報を一つ。きみ、家ではノーブラで過ごしているよね？ 前にきみの家にお邪魔したとき、ちょうど窓から差し込んだ光にシャツが透けて」

「わぁあああぁっ」

なにっ？　なにを突然言っちゃってくれてるの、この人！？

思わず胸元を両腕でおおう私に、超イケはニコツとさわやかな笑みを向けてきた。

「すごくドキドキしたんだから、おれ。相手が小学生だからって、警戒心なすぎ。とまあ、これで信じてもらえた？」

(3)

た、確かに超イケが言ったことは正しい。

私は、不自然なほどにゆっくりと胸から手をおろすと、身体を斜め45度ほど右に動かした。

「まあ、うん。どうしてそうなったのか全然理解できないけど、超イ……もとい、あなたが“あつくん”だってことは信じてもいいかもしれない」

深呼吸を繰り返しながら答えた私に、超イケの表情がまぶしいほどに輝き始める。それが、初めて結婚の条件を出したときのあつくんと重なった。

うわ……、そういえばこんな顔してたなあ、あの時も。本当の本当にあつくん、なんだ。

少しだけ感じ入っていた私に、彼は嬉々としてサラリと告げてきた。

「なら、おれと結婚してく」

「それとこれとは話が別」

あつくんの言葉をさえぎり、私はそう言いになった。途端、見る間にあつくんの表情が暗いものになっていく。恨めしそうな視線をむけてくる彼に、私は思わず目をそむけた。

「そ、そんな顔しても駄目。だって、言ったでしょ？ 15年経つて、めちゃくちゃカッコイイ男の人になってたら、考えてもいい“かも”って」

15年経って、めちゃくちゃカッコイイ男の人になってたらその部分は、否定できそうにない。

イケメンになるだろうな、とは思っていたけれど、まさかこんな、某アイドルグループも裸足で逃げ出しそうなほどになるなんて……、予想外すぎです。

「それにね、女性に結婚を申しこむんだったら、やっぱり何かしらの贈り物が必要だと思うの。えっと、そう。婚約指輪とか」

「婚約、指輪？」

「そうよ。よくテレビドラマでもやってるでしょ？ 給料の三か月分です、みたいな。あつくんがどれだけ私のことが好きなのか、態度で示してもらわないと。ちなみに私、そんじょそらのダイヤとか、普通の宝石には興味ないからね？ とびっきりレアな感じじゃないと、受けつけません」

われながら、むちゃくちゃな条件だ。

でも、結婚なんてまだ考えられないし、しかも相手は、見た目が変わってしまったとはいえ、幼馴染のあつくん。正直、恋愛対象としては全く意識したことがない。

無理を言っただけであきらめさせた方が、彼にとってもいいに違いないよね。

それが通じたのかどうか、彼はふう、と短く息をはいた。

「……確かに、プロポーズするのに手ぶらというのも、おかしい話だったね。わかった、婚約指輪を持って出直すことにするよ」

その台詞に、私は胸中でひそかにガッツポーズ。

ん。出直す……？

「でも、きみの気に入る指輪を持つてくることができたら、今度こ

そおれと結婚してくれる？」

私が彼の言葉にひっかかりを覚えているうちに、彼は真剣な表情でつめよってくる。その様子は、ほんとあつくんと同じもの。変わらない、なあ……。

そう、しみじみと感慨にふけっていたら、私は曖昧ながらも首を縦に動かしていた。……あれ？

彼の落胆していた顔が、一瞬にして満面の笑みになる。

「絶対だよ？ 約束だからね、美結おねえちゃん！」

駆けていく背中 私の記憶の中にあるものより、はるかに大きくなってしまうたそれを見送りながら、私はひしひしと押し寄せてくるデジャブを感じて止まなかった。

次の日。また同じ通学路を歩きながら、私はキョロキョロと辺りを見渡していた。

人通りの少ない、静かな通り。いつもと変わらないその場所に、私は吐息をついた。

昨日のあれは、やっぱり夢か幻？ そっか。私もついに、夢遊病をわずらうようになったのか。とはいっても、すごくリアルすぎた夢だったような気がするけれど。

(4)

それに。

ここに来る途中、ちよつと気になって二軒隣の家をのぞいてみたら、不思議なことが起きていた。

一昨日までは確かにあったはずのあつくんの家が、文字通り消えていた。ポツカリと空き地になっていたわけではなく、両隣だったはずの二つの家がそこには仲良く並んでいて。

まるで、あつくんの家自体、そこには存在していなかったようだった。

「どうなっているんだか……」

首をひねるものの、それで答えが出るわけもない。

その後私は、いつものように平穩無事に高校へとたどりつくことができた。

一日の授業が終わり、帰宅部の私は早々に学校を後にした。朝来た道を、今度は逆に進んでいく。

ああ、そうだと空の雲を見ながら思い出す。牛乳切れてたんだけ、買いに行かなきゃ。さっき通り過ぎた交差点を右折して あ。

そういえばここは、と気づいて、私は後ろに戻しかけた視線を前に向けた。その先には、昨日と同じ、ちよつと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

しまった、帰り道はノーガードだった。

「美結おねえちゃん！」

私を見つけてしまったらしい、後方からあがる嬉しそうな声。私はそれをなかったことにして、早々に来た道を引き返し始めた。

「ま、待つてよ！ どうして帰っちゃうの？」

「どう見てもあなたの方が年上っぽいのに、私を“おねえちゃん”って呼ぶのおかしいでしょ？ だから、私を呼んだんじゃないんだと思って」

「そんなこと言われても、おれ、きみをそう呼んだことしかないし……。じゃあ、なんて呼んだらいい？ 美結ちゃん？ 美結さん？」

そこで一度言葉をくぎった超イケは、少しとまどったあと、ゆっくりとその言葉を口にした。

「美結」

「……！」

それが耳をうった瞬間、私の心臓が大げさなほどに飛びはねる。ストップ！ ストップ！ 呼び捨てはちよつと……、駄目っばいです……！ 横に並んだ超イケに、私は思わず抗議の眼差しを向けた。すると、彼は少し照れたように頬をかく。

「って、さすがに呼び捨てはすぐに慣れそうにないから、とりあえず、美結さんでいいかな？」

そう告げてくる超イケに、私はコクコクと何度もうなずいた。呼び捨てにされるより、全然いいです。ぜひ、そうしてください。

「じゃあ、美結さん。あらためて、おれと結婚してください」

また、それですか。と、私が嘆息するのと、彼が懷から何かを取り出すのは、ほぼ同時だった。

差し出されたのは、革製の、なんだか上等そうな雰囲気の小箱。見当もつかない私は、当然のように首をかしげた。

「なに、これ？」

「なにつて、きみが望んだものだけど」

「はい？」

私、なにか望みましたっけ。……あ。

私が思い出すのと一緒に、小箱が開けられる。そこからあらわれたのは、大人が親指の爪と人差し指の爪をくっつけて を作ったくらいに大きな宝石。超イケが少し動かすと色が変わり、数えた限りでは七色はあった。

えっと、これはその、もしかして 。

「婚約指輪、これでどうかな？」

やっぱり、そうですか。

私は、自分の口元がいやでも引きつるのがわかってしまった。

「宝石自体は、あつちの世界のドラゴンの王が持っていたからすぐに倒して手に入れたんだけど、それを指輪に加工するのに手間取っちゃって……。遅くなって、ごめんね」

かすかに眉を寄せながら、超イケがそう謝ってくる。

あの、ですね。私の気のせいならいいんですが、この人さり気なく、ものすごいことを言いませんでした？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097z/>

幼馴染 恋人になる条件

2011年12月5日20時45分発行